

田坂広志の風を語る

TOPIC

「目に見えない資本」を大切に 成熟した資本主義へ

資本主義の成熟とは？

灰塚 現在の世界の資本主義は、リーマンショックによる世界経済危機を引き起こし、温暖化をはじめとする地球環境の破壊を加速しています。その現実を見てみると、これからの時代、「資本主義」や「経済」というものが、もつと成熟していかなければならぬと思うのですが、田坂先生は、どうお考えでしょうか？

先生は、『目に見えない資本主義』という著書も上梓されていますが、田坂 たしかに、これから世界の資本主義も経済も「成熟」していかなければならないですね。

では、資本主義や経済の「成熟」とは何か？

それは、端的に言えば、「目に見えない資本」を重視する資本主義や経済になるということです。丁度、人間の精神が成熟すると、智恵や縁、信用や世間体、文化や共感など、「目に見えない価値」を大切にできるようになっていきますが、資本主義も成熟すると、「目に見えない資本」を重視するようになっていきます。

大切な「目に見えない資本」

灰塚 「目に見えない資本」とは？

田坂 まさに、いま述べた、智恵や縁、信用や世間体、文化や共感などが、経済学的な言葉で言えば、「知識資本」、「関係資本」、「信頼資本」、「評判資本」、「文化資本」、「共感資本」と呼ばれるものです。

そもそも、これからの時代は、「知識資本主義」の時代であり、「知識経済」の時代。ただ、未だに多くの企業が、「知識資本」とは、特許や知的所有権のことだと思込んでいます。

しかし、知識資本主義の時代に大切なのは、むしろ一人ひとりの社員が持つ「言葉にならない智恵」（知識資本）です。そして、必要に応じて智恵を貸してくれる社外の人材とのネットワーク（関係資本）です。さらに、社外の人材との関係を築くために必要な「信頼」であり、信頼を築くために不可欠な「評判」です。それにもかかわらず、まだ多くの企業が、この「目に見えない資本」を自社の周りに集め、活用していくための戦略を持たないのです。

「日本型経営」への原点回帰

灰塚 たしかに、私自身も、色々な企業のコンサルティングを行っていますが、まだ、そうした「目に見えない資本」を重視している企業は少ないですね。

田坂 ただ、実は、日本型経営においては昔から、この「目に見えない資本」を重視する思想はあったのですね。

例えば、「衆知を集める」や「三人寄れば文殊の智恵」は、知識資本の大切さを語る言葉、「縁」や「お陰さま」は、関係資本、「一意専心」や「浮利を追わず」は、信頼資本、「世間様が見ている」や「恥を知る」は、評判資本、「一期一会」や「おもてなしの心」は、文化資本の大切さを語る言葉だったのです。

すなわち、不思議なことに、これからの知識資本主義の時代に適応していくためには、日本企業は、かつての日本型経営への原点回帰をすることが求められるのです。

経済の「弁証法的発展」

田坂 ヘーゲルの弁証法に、「螺旋的

田坂広志

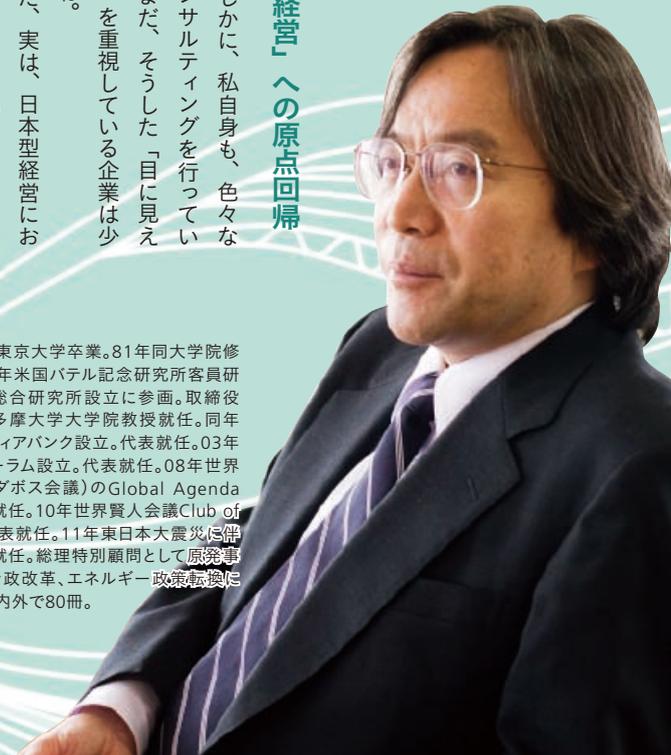
Hiroshi Tasaka
1951年生。74年東京大学卒業。81年同大学院修了。工学博士。87年米国パテル記念研究所客員研究員。90年日本総合研究所設立に参画。取締役等を歴任。00年多摩大学大学院教授就任。同年シンクタンク・ソフィアバンク設立。代表就任。03年社会起業家フォーラム設立。代表就任。08年世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilメンバー就任。10年世界賢人会議Club of Budapest日本代表就任。11年東日本大震災に伴い内閣官房参事就任。総理特別顧問として原発事故対策、原子力行政改革、エネルギー政策転換に携わる。著書は国内外で80冊。

発展の法則」というものがあります。

物事の進歩や発展は、あたかも螺旋階段を登るようにして起こる。螺旋階段を登っていく人を、横から見ていると、上に登っていくが(進歩・発展)、上から見てみると、一周回って元の位置に戻ってくる(復古・復活)。ただし、それは螺旋階段。必ず、一段高い位置に登っている。

それが螺旋的発展の法則ですが、分かりやすく言えば、「古く懐かしいものが、新たな価値を伴って復活してくる」という法則です。

すなわち、この法則に基づけば、古く懐かしい日本型経営の思想が、



「目に見えない資本」は社会貢献の「志」の周りに集まってくる――

新たな価値を伴って復活してくるとも言えるのです。

灰塚 その螺旋的発展の法則は、田坂先生の『未来を予見する「5つの法則」』や『使える弁証法』という本でも述べられていますね？ 私も読んで、とても感銘を受けました。田坂 有り難うございます。あの本でも述べていますが、実は、経済そのものが、古く懐かしい経済に回帰しているのですね。

灰塚 それは、「ボランタリー経済」ですね？

田坂 そうです。ご承知のように、現在の経済は、「貨幣経済」が主流になっています。「貨幣の獲得」を目的として人々が行う経済活動のことで。しかし、「貨幣経済」が生まれてくる前は、価値あるもの同士を交換する「交換経済」、さらにその前には、善意や好意で価値あるものを相手に贈る「贈与経済」が主流だったので。すなわち、人類最古の経済原理、「贈与経済」が新たな価値を伴って復活してきている。それが「ボランタリー経済」です。言葉を変えれば、「精神の満足」を目的として人々が行う経済活動のことです。

ネット革命が変える経済

灰塚 なぜ、いま、「ボランタリー経済」が復活しているのでしょうか？

田坂 一つの理由は、インターネット革命です。この革命によって、知

識や関係、信頼や評判という「目に見えない資本」が、自由に贈ったり贈られたりできるようになったからです。ネット革命以前は、知識や智慧を伝達することも、関係を築くことも、信頼や評判が広がることも、容易ではありませんでした。しかし、この革命によって、「目に見えない資本」が、社会で容易に流通するようになったのです。そして、その結果「ボランタリー経済」が新たな形で復活してきたのです。

灰塚 たしかに、ネットの世界を見ると、ボランタリー経済が花盛りですね。アマゾンの書評も、草の根の人々が無償で書いていますし、Q & Aサイトでは、どんな質問にも誰かが無償で答えてくれますね。

田坂 それ以外にも、ネットの世界では、コンピュータの基本ソフトのリナックスは、世界中の数千名のプログラマーが無償で、24時間、開発に取り組んでいます。さらに、グーグルの検索エンジンは、誰もが無料で使えるサービスですね。

このように、ネット革命が、「ボランタリー経済」を復活させ、知識や関係、信頼や評判、文化といった「目に見えない資本」を社会で自由に流通させるようになったのですね。

「志」を持つ企業の時代

灰塚 では、企業が、これからの知識資本主義の時代に「目に見えない

資本」を自社の周りに集めていくには、どうすれば良いのでしょうか？

田坂 何よりも、その企業が、社会に貢献しようとの「志」を持つことです。

なぜなら、知識や関係、信頼や評判といった「目に見えない資本」は、社会貢献の「志」の周りに集まって来るからです。

そして、「志」を持つ企業の周りでは、「ボランタリー経済」が動き始めるからです。

例えば、組織も資金も無い「社会起業家」と呼ばれる人々が、なぜ、通常の企業が立ち上げられなかった事業を立ち上げることができるのか？

それは、彼らの「志」に共感した人々が、無償で智慧を出し、必要な人材や組織を紹介してくれるからであり、志を持つ企業は、信頼も生まれ、評判も高まっていくからです。

CSR戦略の本当の意味

灰塚 なるほど、それが、社会起業家が活躍できる、一つの理由なのですね？

田坂 そうです。そして、いま、企業が取り組んでいる「CSR」（企業の社会的責任）の活動も、そうした視点から見つめる必要があります。すなわち、一つの企業が、「社会的責任」と「社会貢献」を大切にして活動す

るならば、その企業の周りには、自然に「目に見えない資本」が集まってくるのです。

そして、資本主義と経済の成熟を実現していくためには、まず何よりも、一つひとつの企業が、日本型経営の原点に還り、企業の「志」や「社会貢献の精神」を大切にすることであり、そのことによって、自社の周りに「目に見えない資本」を集めていくことなのです。

そして、そのことは、知識資本主義の時代をリードしていく最善の戦略でもあるのです。

灰塚 その意味では、CSRという活動は、企業にとって、知識資本主義の時代の重要な戦略でもあるのですね。有り難うございました。

インタビュー 灰塚 鮎子

Ayuko Haisuka
経営者・著述家。新潮社、雑誌編集を経て、Elephant設立。心に注目した多様性社会におけるマネジメント手法HARDIAL(ハーディアル)を展開。また著述家としての一面も持ち、自身の哲学および四季折々の自然や心の有り様を、抒情的に現した詩を執筆。また目に見えない心の重要性や心を感じるコミュニケーションをテーマとしたコラムを担当。西日本新聞夕刊「わたし活性化計画」、WEBサイトFan Fun FUKUOKA「Something special」に連載中。